

CNS・CNから学ぶエビデンス

人工呼吸管理を必要とする患者への「体位調整」を考える

急性・重症患者看護専門看護師 門田 耕一

人工呼吸器装着患者への「体位調整」は、患者の病状回復に関係する重要な看護ケアの1つであり、その方法や有効性については、仰臥位に比べて坐位や立位では16~20%の機能的残気量（FRC）増加が得られること¹⁾人工呼吸器関連肺炎（VAP）予防には頭部挙上30~60°が仰臥位に比べて有効であること²⁾などが示されています。しかし、頭部挙上45°の実施に伴い平均血圧65mmHg以下への低下を引き起こしやすい要因として、「ノルアドリナリン投与」「PEEP」「PCV」が示され³⁾、また、頭部挙上30°以上では仙骨部への加重が有意に増加すること⁴⁾から褥瘡発生の危険性もはらんでおり、その実施には注意が必要です。そこで総合診療棟ICUでは、有効な換気量維持を目的に、フィジカルアセスメントを駆使しながら患者の安全安楽を考慮の上、血圧低下や皮膚損傷に留意しつつ、仰臥位は避けて30°程度の「頭部挙上体位での安静臥床を図ること」を日々検討しています。クリティカルケア領域における看護実践では、「実施する看護ケアの目的の明確化」と「デメリット回避への介入」の両面を常に認識しておくことが重要です。



- 1) Agostoni E, Mead J : Statics of the respiratory systems. In : Handbook of Physiology . Respiration. Fenn Wo, Rhan H, sect 3, Vol11, Chapt13, Am Physiol Soc, Washington DC, 387-409,1964
- 2) Wang L, Li X, Yang Z et al : Semi-recumbent position versus supine position for the prevention of ventilator-associated pneumonia in adults requiring mechanical ventilation. Cochrane Database Sys Rev1:CD009946,2016
- 3) Dellinger RP, Levy MM, Rhodes A et al : Surviving Sepsis Campaign: international guidelines for management of severe sepsis and septic shock, 2012. Intensive Care Med 39 (2) : 165-228,2013
- 4) Peterson M, Schwab W, McCutcheon K et al : effects of elevating the head of bed on interface pressure in volunteers. Crit Care Med 36 (11) : 3038-3042,2008

糖尿病足病変の「予防」に有効なフットケア

糖尿病看護認定看護師 料治 三恵

糖尿病足病変は「神経障害や末梢血流障害を有する糖尿病患者の下肢に生じる感染、潰瘍、深部組織の破壊性病変」と定義されています。日本における糖尿病治療患者の足壊疽合併率は0.7%(平成19年厚生労働省国民健康・栄養調査)であり、糖尿病患者での下肢切断率は健康者より15~40倍高いといわれています。糖尿病足病変の原因としては、主に①末梢神経障害②末梢動脈疾患③感染があげられます。「予防」の視点からフットケアを考えたとき足病変予防に効果的な教育として、観察の視点、洗い方、靴・靴下の選び方、爪の切り方、手入れの方法、暖房器具使用時の注意点、禁煙などリスクと生活状況に沿った具体的な説明が必要です。



患者教育で重要なことは、ほめてやる気を促すこと、セルフケアの存続意思を高めていくことです。そして、看護者として患者さんが話す物語を聴き、足への思いやどう向き合ってきたかを知ろうとすることです。看護師が患者の目前でケアを行うことも患者さん自身がケアの方法を学び、足病変ケアの必要性を認識でき、教育につながるとされています。適切なケアを行うことで足病変の予防・早期発見に努めていきたいと思っています。

【特集】エビデンスに基づくフットケアの実践, Ebnursing, Vol.4, No.1, 8-26, 2003.

大学から学ぶエビデンス

「老いを生きる」高齢者をどのように理解していますか？

保健学研究科 コミュニティヘルス看護学領域 沖中 由美

日本では健康寿命の延伸への取り組みがなされています。その一方、アンチエイジングを謳うマスメディアからの情報は日常的に配信されています。老いに対する外在化された価値意識を自己に取り込み、まるで自分の内側から自然に発生してきたような錯覚が生じる過程を老いの内面化の過程といいます(栗原, 1986)。いつまでも若々しくいることが健康や美容のうえで有益であるという社会からのメッセージを受けて、若い世代の人は老いることに対してどのような価値意識をもち、今、老いを生きている高齢者は自分にどのような価値意識をいだくでしょうか。

人は誰も老い、死を迎えます。生涯発達において、高齢者の老いを衰退や喪失だけで説明することはできません。年を重ね身体や社会的環境は変化しても、変わらない自己があるといわれています(Kaufman, 1986/1988)。そして、人は死ぬまで成長し続けます。病気や障がいをもった高齢者一人ひとりのライフストーリーを聴き取り、前進的に「老いを生きる」高齢者を理解し、支援することがQuality of Life を高めることにつながります。



1月7日(土)に、徳島大学で行われました「徳島EBMワークショップ」にファシリテーターとしてはじめて参加しました。このワークショップは徳島大学の図書館の司書の方々が企画・運営をしている歴史ある会です。講師は昨年9月に当院で開催した「EBPワークショップ」と同じ倉敷中央病院の福岡敏雄先生、論文テーマも同じく『Safety and Benefit of Discontinuing Statin Therapy in the Setting of Advanced, Life-Limiting Illness A Randomized Clinical Trial』でした。



この論文の内容をふまえ、進行癌の患者さんにスタチンの処方中止の判断は妥当であるかと思うか、また、似たような状況の患者から病室で「続けた方がよいでしょうか？」と尋ねられたら、どのように説明しようと思うか、グループごとにディスカッションしました。参加者は25名、臨床の看護師さんも数名おられました。岡山大学からは、抄読会のメンバー4名がファシリテーターとして参加しました。ファシリテーター初心者の私としては、新たな発見がいくつもあったことと、同じような志の仲間がいることを大変心強く思いました。徳島大学と岡山大学とで新たな交流ができればと思います。

ヤンゴン看護大学教員が岡山大学病院で研修



1月22日から2月3日まで、ヤンゴン看護大学の教員2名が岡山大学病院で研修をされました。準備に当たっては、『ヤンゴン看護大学教員の看護実践人育成プログラムの開発』のために、看護部、保健学研究科、看護研究・教育センターの3部門が共同でワーキング・グループを結成し、9日間のプログラムを作りました。日本の医療、岡山大学病院の役割、看護部の管理体制・教育体制等について講義をうけ、整形外科病棟、高度救命救急センター、手術室の見学を通じて、岡山大学病院の看護実践の実際を理解してもらいました。また、岡山県看護協会、旭川荘療育・医療センターの見学を通して、地域における看護職の位置づけや総合医療福祉施設の理念や役割についても見てもらいました。部署の皆様には、本当にお世話になりました。講義をしてくださった先生方、ありがとうございました。今後も、ミャンマーとの交流が色々な形で続くことを願っています。



「文献検索研修」開催中

日々のケアについて調べてみよう！と思いついたけれど、文献検索ってどうすればいいの？とお悩みの方々に向けた研修を企画し、図書館鹿田分館の職員の方を講師に、平成29年1月18日と2月28日に「文献検索方法」研修と題して開催しました。皆さんから寄せいただいたキーワードを基に、医中誌の利用方法を中心とした内容で、どこに入力するのか、何に注意しながら見ていくのかなどを教えていただきました。3月29日(水)にもう一度行います。日頃気になっているワードを調べるきっかけにもなりますので、お申込をお待ちしています。



HP
改訂の
ご案内



【看護研究・教育センターHP】

【研究業績について】



看護研究・教育センターホームページ内「研究について」のページに上記の2項目を追加しました。

『研究業績』では、年度ごとの研究支援や学会発表などについて掲載しています。『研究・教育に関する補助金について』では、研究等を行う上で重要な予算獲得に関する情報をお知らせします。ぜひご活用ください。

【研究・教育に関する補助金について】



岡山大学病院 看護研究・教育センター



【編集後記】 あっという間に1年が過ぎ、年度が変わろうとしています。ホームページや研修も年度ごとに少しずつ変化しています。ご要望などがあつたら、お教えくださいませ。また、今年度の大きな取り組みの一つに、ミャンマー・ヤンゴン看護大学の教員研修がありました。お迎えて、改めて英語能力の低さを痛感しましたが、異文化コミュニケーションの楽しさも知ることができた2週間でした。(馬場)